

二、天音の正体

「どうぞ……」

ぶっきらぼうな態度で凜は湯飲みをコタツの上に置いた。

「ありがとう」

凜のその態度に何も臆することなく、雛子が笑顔を返した。

「……………」

そして天音は、ただ黙っているだけだった。

ここは鈴鳴屋の居間とでも言おうか？

店舗の四階部分であり、凜たち店の従業員の生活空間である。洋式の建物であるので、ここには本来、ソファやテーブルセットなんか置かれるはずなのだが……………。

「畳……………」

凜が持ち込んだのか、このリビングには畳が敷き詰められ、コタツに座布団が据えてあったのだ。

「で？ わざわざ泥棒まで働いて？ 鈴鳴屋ウチに何の用があるってのよ!?」

あまりに落ち着いた雛子の態度に腹が立った凜は、その思いを隠さずいわずいと上半身をコタツの上に乗りに出して雛子の顔をのぞき込んだ。

「万引きをしたのは悪いと思っている。でもそうでもしないと、あなたたちと接点を作るのが難しかった」

当の雛子はまったく悪びれる様子もなく、いつもの口調で淡々と返した。

「あのねえ、ウチらに用があるんなら、閉店してから訪ねてくるとか！電話してくるとか！いろいろあるでしょ!!」

ついに凜の声が怒鳴り声に変わった。

「それでは、シラを切られて終わると思っ、実力行使に出た」
しかし雛子はまったく動じずに、ずずーっと茶をすすった。

「ふう……」

そして気持ちよさそうに一息つく。

「盗人にこんなイイお茶を出してくれるなんて、鈴鳴屋はいい店」

そして満足そうに目を細めるのだった。

「そ・れ・し・か、なかつたのよ!!」

凜はたまらずドンとコタツに拳を振り下ろした。

「り、凜、落ち着いて……!!」

ここで初めて、ずっと黙っていた天音が口を開いた。

そして、うつむいていた顔を上げ、雛子に視線を合わせた。

「あなただったのですね……昨日からわたしの力を消そうとしていたのは」

夜中、目が覚めたときのことを、天音は思い出していた。

「そう、その通り」

雛子は自信たつぷりに頷く。その表情は嬉しさとそして確信に満ちていた。

「もし普通にわたしがコンタクトをとっていたら、あなたたちは絶対にまともに取り合ってくれないと思った。だから、非合法な手段を執った」

それから雛子は、ボールペンを万引きしてからのことをつぶさに話した。猫に追跡されたこと、猫に自分がしたこと、しようとしたこと、透明化の魔法で桃髪の子——つまり、天音——が追ってきたこと、そしておそらくではあろう猫への教育内容に至るまで。そしてそれはまさしくその通りであった。

「こんなにも早くネタがバレるなんて……」

先ほどまでの威勢はどこへやら、凜はすっかり肩を落としてしまった。

「わたしたちに魔法を使わせたかったのですね」

天音が念を押すように尋ねる。

「そうしなければ、意味がなかったから」

雛子は目を輝かせて天音を見つめる。そう、それはまるで新しいおもちゃを与えられた子供のようなのだ。

「で？ あたしたちが魔が使えるからなんだって言うのよ!?」

今度、凜が気になるのはそこである。

何故、この万引き少女が、魔の力に執着しているのか。もしかしたら自分が化け猫であることさえもすで見破っているのかも知れない。

「うん、友達になって欲しい」

「は？」

単刀直入だった。

そしてその雛子の言葉は、二人の予想の遙か斜め上を行っていた。

「ともだち？」

「そう。わたしは小さい頃から、魔に携わってきた。たくさん魔の勉強もしてきた。けれど、誰も魔を、わたしを理解してくれる人はいなかった」

いや、誰もというところは嘘になる。

雛子には自分を理解してくれる、力強い味方がいる。

天野光人だ。

しかし、彼は雛子の良き理解者であり、加護してくれる大切な存在ではあるが、魔を扱う者

の苦勞を共に分かち合ってくれる存在ではない。彼は天使だから、魔を勞せずして使うことができる。

人が魔を使うことが如何に大変であるか、それを理解し、また共にその道を歩んでくれるわけではないのだ。

だが、目の前にいる鈴鳴屋の二人は違う。

自分と同じ人間であり、魔を習得するために多大な努力を強いられてきたに違いない。

雛子はそう確信しているのだった。

「ともだち……ですか……」

天音が拍子抜けして、体中の力が抜けるのが解る。

ずっと緊張していたのだ。

鈴鳴屋に並ぶ商品のネタが世間にバレてしまったらどうしようと……天音はそのことを心配していたからだだった。

「どんな理由があるうと、万引きをするヤツなんか信用できないわね！」

「凜……」

「お店を手伝ってもいい。見た感じ、人手は足りなそう」

「う……」

雛子のその申し出は、凜にとってなかなか抗しがたい提案だった。

「だ、だめ！ 万引きなんかするヤツを店員なんかにできないわよ」
しかし慌てて考え直して、首をブンブンと振った。

「そう……」

雛子の表情が曇る。

「だいたいどうして、あたしたちななのよ!?」

「だから、あなたたちが、魔を使うことができるから」

雛子は天音の手を取った。

「あ……」

可愛い、小さな天音の手。

「魔はいつも孤独。わたしはずっと独りだった」

雛子は天音の瞳を見つめた。

そしてその言葉は、天音の心にまるで鐘のように響く。

「……………」

魔は、孤独。

それは天音も一緒だった。

両親と兄に先立たれ、いつも天音はひとりぼっち。

亡くなった愛する兄の命を、魂を、たった独りで探し続けた。

誰にも理解されず、返って腫れ物のように扱われ、親戚中をたらい回しにされた。行き着いた場所が、あの別荘だった。

そして、そこにおいても独りだった。

「けれど……それが魔というものだと思います。魔を手にするということは、孤独と不幸を手にする事なのです」

寂しそうに天音は答えるのだった。

* * *

重々しい金属の扉が開かれた。分厚い金属のこすれる音が、不気味にこだまする。中は薄暗く、蠟燭の頼りない光が、ゆらゆらと揺れているのが見えた。

一步、また一步と歩みを進めると、足音が何重にも反響する。

天井からは街の明かりを吸ったステンドグラスが、七色の影を床に落としていた。

ここは汐碕市の南に位置する、南区三位^{さんみいつたい}一体教会。汐碕に古くからある教会である。

「お久しぶりです、ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラント様」

礼拝堂のもっとも奥、最前列の席に一人の男が座っていた。

黒いコートに黒の中折れ帽。この暗がりだというのに、サングラスまでかけている。

彼は後ろから近づいてきた人物に振り返りもせず、恭しく語りかけた。

「うむ、急に呼び出して、すまなかったのう」

当のルイーゼも男とは視線を合わせようとせず、その男の隣に座った。

「……香水の種類を変えましたね、ルイーゼ様」

「これは死の香りじゃ、ルドルフよ」

「そうですか……今回はあまり良い話ではなさそうですね」

「うむ」

彼女は頷くと、一通の封書を男に手渡した。

「月下美人……」

男はその封を見たとき、封書を受け取るのを一瞬ためらった。

しかし、すべてを諦めたかのようにそれを手に取ると、ゆっくりと中身を取り出した。

「冷泉天音……?」

そこには一人の人間の名前が、ただ書かれているだけだった。

「可哀想にのう……まだ大人にもなりきっておらぬ、かわいらしい娘じゃ」

「この子が、まさか?」

「禁忌に触れたのじゃ。我ら賢者に匹敵するほどまでに成長してしまったのじゃ。我らがもう少し早く気付いておれば……止めることもできたかも知れぬがの」

「この若さで禁忌に触れるとは……信じられません、ルイーゼ様」

「なに、天才というものは何の前触れもなく、突然生まれて来るものじゃ。そして真の天才ならば、生き残るじゃろう」

「……………」

「余計な説明はせぬ。ただ、其奴を殺せ、それだけじゃ」

「かしこまりました」

「本来、我ら法の番人が、自ら人の命を殺めるのは忍びないのじゃが……」

「これもまた、賢者の掟です、ルイーゼ様。法なのですよ」

「解っておる。では、頼んだぞ、ルドルフ」

「は、仰せのままに」

男は深く頭を下げると、音もなく立ち上がった。

そしてもう一度深く礼をし、音もなく、その場から立ち去った。

しばらくして、礼拝堂のあの重い扉が閉まる音だけが響き渡る。

「前途有望な若き命を絶つことになろうとは、なんと罪深きことよ」

ルイーゼは祭壇の前で跪くと、そうつぶやき、大きな十字架を見上げるのだった。

* * *

翌日、雛子は生徒会室にいた。

雛子の計画では、放課後のこの時間は鈴鳴屋で手伝いでもしているはずだった。何せ、鈴鳴屋の人たちと「ともだち」になっていたはずだからだ。

しかし、それは適わなかった。

「……………」

従って、雛子の機嫌は悪かった。

読みかけの本を広げてはみるものの、全然頭に入ってこない。

「……………」

さっきからページを送っては戻り、送っては戻りを繰り返している。

雛子の機嫌が悪いというのは、この生徒会室にいる誰しもが察していた。しかしどうにも根が深そうなので、誰も雛子に触れようとしなかった。故に、雛子の無造作にページをめくる音だけが、この生徒会室に響き渡るのである。

「あのさ、うっとうしいんだけど」

しかしついにしびれを切らした人物がいた。

やすらである。

「なに？」

雛子も負けてはいない。低い声で返事をする、ジロリとやすらを見やる。

「さっきから読んでもないのにべらべらとページをめくって、うっとうしいって言うてんのよ」
「……………」

雛子の手が止まり、ページをめくる音がやむ。

「何かうまくいかなかったのか？」

光人が雛子を見るふうでもなく、書類に次々と目を通しながらも尋ねてくる。

「魔を自由に操れるあなたたち天使に、今のわたしの気持ちはわからない」

自分を理解してくれる者。

いや、魔を扱う者としての孤独を共有してくれる者。

それは孤独に圧迫されてきた雛子の、かすかな希望だった。

しかし、桃髪の少女は言った。「魔を手にすることは、孤独と不幸を手にとることだ」と。

雛子は悟った。自分にはまだ魔を扱うことへの覚悟が足りていなかったのだと。あの桃髪の少女が何故自分よりも優れた魔を扱えるのかも、何となく理解してしまった。

まだまだ自分は未熟なのだ。孤独と不幸を克服し切れていないのだ。

「どうやら、根が深そうだな」

光人は持っていた書類をデスクに置くと、やれやれとため息をついた。

「鈴鳴屋で何があったんだ？」

「言わなくても解っているクセに」

「俺はそこまで万能じゃない。自ら隠そうという意志のあるものを、無条件に知ることはできないさ」

「無理矢理のぞけばいい」

「俺は、雛子の口から直接聞きたいけどな」

「むう……」

「結局、鈴鳴屋の魔法使いには、会えたのか？」

その言葉に、その場にいた瑠璃火も反応する。

「魔法使い？ どういうことですか、光人さん？」

しかし光人は答えず、黙って雛子の返事を待った。

瑠璃火もそれにつられて、雛子に視線を合わせてしまう。

「会えた」

雛子のはっきりとそう答えた。

「まあ……」

驚きを隠さない瑠璃火。

しかしやすらは、至って冷静だった。「あっそ」と言わんばかりの興味なさっぷりである。

「やすらは、知ってたか」

その反応を見て、光人が少しあきれれる。

「どいっても、連絡入ったの、昨日の夜だけどね。神宮司が魔法使ったのも、バレてるわよ」

「ふん」

「あたしの出る幕はなさそうだけど」

それよりも何よりも、やすらにとっては、単純に雛子のイライラがおさまれば、それで満足なのである。

「やすらの所はどうしろって？」

やすらはこの街でのいわゆる非科学的な現象を察知し、監視する命を負っている。もしやすらの元に、鈴鳴屋を留意する通達が出されているなら、光人も雛子に対して何か策を講じなければならぬ。

「スルーでいいって」

「スルー？」

「組織として監視はするけれど、現在の所、問題なし」

「つまり、干渉はしなくていいってことか」

「うん」

「ふむ……俺の取り越し苦労か」

「これはわたしと鈴鳴屋だけの問題……いや、ちがうか……」

「？」

「わたしだけの……問題なのかも」

雛子は寂しそうに、うつむいた。

* * *

「あー、今日もお客さんいっぱいだったー」

凜が肩をトントンと叩きながらレジのお金を集計する。

「お疲れ様、凜」

「天音こそ、お疲れ様」

「閉店までお客が途切れないなんて……ほんとに息をつく暇もない……」

天音はううーんと伸びをする。こうするだけでも、なんだか仕事の疲れが抜けて行くような

気がした。

「そうなのよ、だからね、天音、土日は店を閉めようと思うのよ」

「え？ 土日って？」

「だって平日でこの盛況ぶりなのよ？ 土日なんて、もっと大変なことになるわよ」

「言われてみれば……」

「まだ定休日って決めてないし、いろいろ試してみないとね」

「じゃあ、土曜日はお兄ちゃんの所に戻ろうかな……」

「フフ、もうホームシックなの、天音？」

「えー？ い、いえ、そういうわけじゃ……」

「そう？ ものすごく物欲しそうな表情してたけど？」

「う……」

「顔真っ赤にしちゃって」

「はう……」

「それに、鈴鳴屋の場所も解ったから、これで術で行き来できるでしょ？」

「あ……」

「毎日だって帰れるんじゃない？」

「そっか……」

そうと解ると、なんだか急に兄のいる場所に行くことがどうでも良くなってしまった。

「何よ、急に冷めたわね」

「あ、う、うううん、そんなことはないけれど……いつでも帰れるならいいかかって……」

おかしい。

大好きな兄のいる場所へ帰れるというのに……どうして急にどうでも良くなってしまったの

だろうか？ 天音自身、よくわからなかった。

「無理しないで、帰って陸に思いっきり甘えなさいよ」

「う、うん……」

好きな人に甘えたい。

けれど、その人の心は別の人と結ばれている。

一生のほとんどを魔の勉強に費やして、愛する人を取り戻した。

愛する人が戻ってきて、孤独から解放されると思っていた。

けれど、その愛する人は……別の人を愛してしまっていた。

もっと厄介なのは、その別の人というのは、自分でもある……。

「はあ……」

考えれば考えるほどややこしい。

そして、結局、自分は独りぼっちなのだ。

あの緑髪の人の言葉が、心に沁みる。あの人もまた、独りぼっち。

「ほんとうにため息ばかりね、天音は」

「あ……ごめんなさい、気をつけなくちゃ」

ただでさえ幸が薄いのに、ため息なんかしたら余計に幸が逃げて行ってしまう。

「今日は……あの人、来ませんでしたね」

「あの人？ あー、あの万引き女！」

凜はまだ怒っているようで、尻尾の毛を逆立てた。

「万引きは別に目的じゃなかった……あの人は私たちに会うために……」

「いやー！ 万引きは万引きよ！ 泥棒なのよ！ ものを売る者として、どんな事情があっても許せないわね！」

「それはそうだけど……でも、わたし、あの人の気持ちは充分わかるの」

「気持ち？」

「うん、孤独だったこと」

「ああ……ま、魔が使える人間って、珍しいもんねー。そもそも人間が使うものじゃないし？」

「うん……」

「人間は万物を感じる部分がすごく欠落してるしねー」

凜は不憫そうに天音を見つめた。

「あの人も、きつと不幸を背負っていると思う」

「ふん！ んなの、知らないわよ」

「……凜」

やっぱりこの感覚は、魔を学んだ人間でしか解らないのかも知れない。

そしてあの人はずっと、同じ境遇の人間を捜し続けていたのかも知れない。

「ちょっと散歩してきていい、凜?」

「ん? 晩ご飯にしないの?」

「考えてみれば、わたし、この街のことよく知らないし……少し見てみたいの」

「あー、そういえばそうよねー。ずっと仕事づくめだったし。よし、晩ご飯を食べに行くついでにいろいろ案内してあげるわよ!」

「ありがとう、凜」

「そうと決まれば、さっそく行きましょ!」

凜はエプロンを無造作にたたむと同時に、フカフカの耳と、自慢の尻尾もしまった。

「今夜は何を食べるの、凜?」

「そうねえ、あたしはお魚がいーんだけど……」

「フフ、この街って海がないから新鮮なお魚は無理そう」

「そうなのよ! だいたい空に浮いてるから、持ってくるのも時間かかるじゃない!? イマイチなお店が多いのよ〜〜」

凜は悔しそうに拳を作る。

「まー、何を食べるかは、街に出てから決めればいいんじゃない?」

そう言いながら、出入り口を開けた。

「あ!」

「あ……」

「あ……」

三人の声がかぶる。

三人。

そう、凜が開けた扉の向こうには、雛子が立っていたのだった。

「万引き女！」

凜がびしっと人差し指を指す。

「う……」

雛子が怯む。

「なんか用？」

そして不機嫌そうに、まじまじと雛子の顔を見つめた。

「どうしても……未練がなくならなくて、来てしまった」

「しつこいわね！ あたしたちこれから出かけるのよ、間が悪かったわね！」

凜はふいとそっぽを向くと、これ見よがしに鍵を取り出した。

「そう……」

雛子は残念そうにうつむいてしまった。

「凜……」

「なに？」

「わたし、この人と食事に行ってきたてイイ？」

「え!？」

「この人の苦しみは、わたしの苦しみと同じ。だから、わたしに解決することができるなら、してあげたい」

「むー……」

凜は不満そうに雛子のことをジロジロと見る。

「あ、その、予定があるなら……今日は諦める……」

当の雛子は遠慮がちだった。そもそも最初に万引き女と言われたことが、彼女の威勢をそいでしまったらしい。

「うううん、凜とはいつでも食事はできるし、大丈夫。その代わりに、あなたに街を少し案内して欲しいの。わたしはこの街にまだ来たばかりだから」

「いいの、天音？」

凜は念を押す。

「うん」

天音はそれを笑顔で返した。

「じゃ、あたしは中で食べるわ」

「ごめんね、凜」

「気にしなくていいわよ。けど……」

「？」

「変な影響はされないでよね」

そう言って、じとーっと雛子を見た。

「う……」

万引きという行為が、ここまで後を引くとは雛子も想像していなかったらしい。いや、雛子からすれば、お互いが魔を扱う存在だと解った段階で、わかり合えると思っていたのだから、仕方のないことである。

「クス、これ以上、変になりようはないと思う」

天音はバツが悪そうに笑った。魔を扱う人間というだけで、充分に変なのだと言いたいらしい。

「ハイハイ」

凜は苦笑しながらも、鈴鳴屋の中に引っ込んでしまった。

* * *

「四卓さん、注文承りました——!!」

「はい、あじの塩焼き定食、お持ちしました——!!」

「十五卓さん、お呼びで〜す!!」

ひっきりなしに聞こえてくる店員の声。

そして、周囲は学生ばかりで、ワイワイガヤガヤ。

雛子が天音を連れてきたのは、大江戸屋^{おおえどや}という大衆向けの定食屋チェーンだった。

「あの、その……これくらいしか知らなくて……」

雛子くらいの学生が利用する外食店となると、ファミレスやファストフード店となってしまう。しかし雛子は大の和食党。自^{おの}ずと大江戸屋に決まってしまったのは、ある意味仕方ないことだった。

そもそも雛子にとって外食というと、光人ややすらについて行くくらい。瑠璃火について行くと破産は必至だし、あまり外で食べることがないのである。

一方、当の天音はというと、どこか静かなレストランにでも連れて行ってもらえると思ったのは口が裂けても言えなかった。

「活^{にぎ}気があつて、賑^{にぎ}やかなところですね……」

天音は自分の中で思い浮かぶ精一杯のポジティブな感想を述べた。

「和食が好きなら……ここのはおいしいから……」

「みたいですね、凜も連れてくれば良かった」

メニユーを見ると、海産モノのメニユーが豊富だった。一夜干しに刺身に煮付けに、一通り揃っている。しかも値段もリーズナブルだ。大江戸という名前からして、江戸前などを売りにしているのだろう。

「きよ、今日は、ありがと……」

「え？」

「もう半分あきらめていたから」

雛子はふうとため息をつく。

「ううん、わたしもあなたに会えて、少しホツとしてたりもするから……」

「ホツと？」

「他にも魔を使える人間がいるんだって」

「うん……わたしも初めて会った」

もっとも雛子の場合、魔を扱う人間ではなく、天使がそばにいたりするわけではあるが。

「わたしは神宮司雛子。聖天翔学園の高等部二年」

「わたしは冷泉天音。学校には行ってないのですけど……あのお店は、手伝いで来ているの」

「あのお店にあるものは、すべて天音が作ったの？」

名前を交わしたかと思うと、さっそく雛子の質問攻めが始まってしまった。

「えっと……それを説明するには、その前にいろいろと話すことがあります、神宮司さん」
天音は話すべきことを頭の中で整理し、そして順を追って、一つ一つ話し始めた。

妖怪だけの村があったこと。

人間によって住む場所を追われたこと、村はダム湖の底に沈んでしまったこと。

妖怪たちは山奥にある古い別荘を中心に、ひっそりと今でも暮らしていること。

そして、その妖怪だけの村にあった唯一のお店が、鈴鳴屋だと言うこと。

魔を知らない人間が聞けば、ただのお伽噺とてはなしである。

ただ一点だけ、天音は話していないことがあった。それは、天音の兄、陸の蘇りである。

天音の魔の力によって、死者を蘇らせた……そのことだけは同じ魔を知る雛子が相手であっても、話して良いのかどうか、天音には解らなかつたのだ。

「じゃあ、あの凜という子は……」

「うん、凜は妖怪なの。だから、わたしたちとはちよつと違うかも……」

「なるほど」

「神宮司さんは、どうして魔の力を手に入れたのですか？」

今度は天音が尋ねる番だった。

雛子もまた、天音に話す前に情報を整理する。

もともと魔は好奇心から始まったこと。

この街に伝わる天使の伝説を追っていたこと。

魔が本当にあることを知り、天使の伝説に到達できたこと。

しかし、魔の解明は頓挫していること。

「神宮司さんは、純粹な魔法使いさんなのですね」

天音は憧れるように、雛子を見つめた。

「え……？」

その天音の瞳に、雛子は狼狽うろたえた。その瞳は、本来雛子から天音に向けられるべきものであって、雛子よりも間を使いこなす天音がしても良い瞳ではないはずだった。

「純粹？」

雛子は天音の真意を知りたくて、聞き返した。

「はい」

天音は兄を蘇らせるために、魔に手を染めた。言うなれば、兄を蘇らせるという目的が達成されれば、それが天音にとっての魔のゴール地点。これ以上の魔は必要ない。

しかし雛子は純粹に魔の高みを目指している。

「わたしはもうこれ以上の魔は、必要ありませんから」

その言葉は、満足と諦観が混じった、不思議な感情に包まれていた。

「けれど、神宮司さんの言うとおり……」

「？」

「魔の探求をやめても、孤独から逃れることはできませんでした」

そしてその言葉は、悲しみに満ちていた。

蘇らせた兄とは、一緒になれなかった。

自分は取り残されただけだった。

結局、兄を蘇らせた意味などなかったと思ってしまうことすらあった。

「ならば、その孤独を貫き通すしかないと思う」

「え？」

「つまり、魔の探求を続けること」

「神宮司さん……」

「それに、わたしたちが出会う事によって、少なくとも独りではなくなった」

「……………」

魔法使いが、魔法使いと出会う。

確かにそれは今の世において、稀まれなことなのかも知れない。

「けれど、わたしにはもう魔の必要が……」

魔を学んでどうするというのだろうか？

無理矢理、兄の心を変えて兄を自分のものにすればいいのだろうか？

生まれてしまったもう一人の自分、夕奈ゆうなを、跡形もなく消し去ってしまえばいいのだろうか？
そんなことが魔で可能だったとしても、然そうして手に入れた兄を、心から愛せるだろうか？
「もったいないと思う」

「もったいない……ですか」

「天音はわたしよりも優れた魔をたくさん持っている。ここで歩みを止めたらダメだ」

「で、でも……」

「それに、今、ここで魔の歩みを止めてしまったら……わたしたちはずっと孤独のままだと思う！」

「あ……」

「もつとも、魔の探求に、ゴールはないのかも知れないけど……」

「それもそうかも知れませんが……」

そして二人は黙ってしまった。

大江戸屋の喧噪だけが、遽あわただしく流れてゆく。

「秋刀魚定食の方々」

だが、大江戸屋の店員が料理を持って来たところで、二人の沈黙は途切れてしまった。

「あ、はい、わたしです」

天音がはっと我に返って、慌てて小さく手を上げる。

「はい。ではこちらが、サバ煮定食でございます」

店員は秋刀魚定食をまず天音の前に置き、そしてサバ煮定食を雛子の前に置いた。

「ご注文は以上でおそろいですか？」

「はい」

「ごゆっくりどうぞ」

店員とのお決まりのやりとりが終わると、二人は一息つき、夕飯を食べ始めるのだった。

* * *

「はれ、あまねはいらないの？」

ふわふわした呂律ろれつの回ってない声で、畳の上で大の字になっているでっかい狐がいた。いや、一応人型はしているが……普段隠しているモフモフの尻尾と同じくモフモフの耳がなんといっ
ても目に付いてしまう。

「あのね、晩ご飯に出かけたって何度言えば解るのよ！」

凜はもうめんどくさいと言わんばかりに、ドンとコタツを叩く。

「なによお……せっかく、人が、様子見に……きら＊たっていうのに！」

しかし狐の方は、すっかりできあがってしまっているようだ。

「お酒飲む理由が欲しかったただけでしょ」

凜はずばつと切り捨てる。

「らああああってえええ、一〇〇年ものさ？ コニヤックがさ？ 手に入らた!!! って言われたらさくくく？ んもくくくそりゃあ、ほいほい行くわけよ、ね？ ね？」

「そしらら!! うひよああああああ、もうれ、おいし——いんよ？ ひよれが、もう！」

「一〇〇年っていうひゃ？ 長〜い長〜い時間の味がひゃ？ んもく〜ひとくちひとくちにい……ひようしゆくされてるわけよほ！ わかる？」

ダメだ、手に負えない。

だいたい一〇〇年物のコニヤックとなると、その値段を考えるだけでも恐ろしい。

しかも、ウワバミの彩がここまで酔うほどのものとなると、相当量飲んだはずである。

「こうやって、はるばる遠くかや、来らるに……あまねが、いらいらんれ！ 天音——！」

「ああ、もううるさい！」

「だいたい、らんれ、あまねが、ひとりれ、れかけるろよ!」

「独りじゃないわよ」

「へ？ そうらる？ 他にられかいるろ？」

「万引き女と一緒に、ご飯に行ったのよ！」

「はへー、まんびき！ おんら!!」

あーもう、自分もどこかに食べに出るんだったと後悔する凜。それならばこの酔っぱらいと会うこともなかっただろう。

それに、凜はもう一つ、不機嫌になる要素があった。あの万引き女である。天音は、自分と食事に行くことよりも、万引き女と行くことを選んだ。それに少しムカついているのだ。

「まんびきおんら！^なられ——!？」

そして酔っ払った彩が押しかけ、もう、踏んだり蹴ったりである。

しかもこんな状態の彩に何を話しても、まともに通じるわけもない。

「まんびきおんらって、られ——!？」

「^{だれ}られらって、聞いてんのよ——!？」

だがいっこうに彩は引き下がる気配がない。

凜はため込んでいたこともあって、彩がちやんと聞いてくれることなど期待せず、昨日あったことをグチグチと話し出した。

万引きしたヤツがいて、そいつは鈴鳴屋の商品の仕掛けに気付いていて、天音に魔法を使わせるために無理矢理ウチの商品を盗んだこと。

その万引き女が、今日も来て、天音と飯を食いに行ったこと。

「ふ~~~~~~~~」

「い!？」

いつの間にか、コタツを挟んだ向かい側に、彩が座っていた。

「それ、不味いかもよ？」

そしてさっきの酩酊していた彩はどこへやら、まじめな顔をして、そう言うのだった。

「もう酔いが覚めたの？」

「酔いなんて、いつでも自由に覚ませるわよ？」

「……………神様ってズルい」

「そう、この街にもいるのね、魔法使いが。まー、なんだって、空に浮いてる街だもんねー、そりゃそう言うのがいてもおかしくはないわよねえ」

「みたいね」

「他に話したことは？」

「話したこと？」

「その魔法使いと、よ」

「天音に聞いた方が早いんじゃない？　なんか、孤独がどうか、不幸がどうかって言うってたけど、あたしにはいまいち解らなかつたわよ」

「ふくん、なるほどねえ」

「会わせちゃ、まずかった？」

「たぶんね」

「げっ」

「天音、とられちゃうかもよ？」

「とられるってどういう意味よ？」

「鈴鳴屋の手伝いよりも、魔をとるってことね」

「それは困るわねー」

「こまるでしょー？」

「どうすればいいの、彩センセ？」

「うーん、しーらなうい」

「あのね!!」

「とにかく、一度、天音を連れて帰るわ」

「え！ ちょっと、まだ手伝って欲しいことは山ほどあるのに!？」

「二〜三日くらい、我慢しなさいな」

「せめて代わりをよこして!」

「んもう、しようがないわねえ、紗雪さゆきでもよこす？」

「それはやめて」

きっぱり。

「なんで？」

「寒いから！ただでさえ、この街は寒いのに!!」

「あんた寒がりだかんねー」

「うるさい!」

「まあ、式神しきがみ三体くらい置いとくわよ」

「それなら、まあ大丈夫かなあ……」

* * *

一方の天音と雛子は、うるさかった大江戸屋を出て、少し離れた公園に来ていた。汐碕市の街の明かりがうっとりとういしいけれども、それでも標高六〇〇メートルという場所は、星を見るには最適だった。

数秒も見上げていれば、流星に出会える。

「素敵なところですね」

天音は両手をいっぱい広げて、星々を抱きしめたい気持ちに駆られた。

天音が住んでいる場所も田舎であり、標高も一〇〇メートルほどはあるから、星がよく見える。しかし、汐碕市から見える空は遙かに星が多かった。

「本当は周囲がもっと暗くて、星がよく見える公園があるのだけど、ここからは少し遠

い……」

雛子は残念そうにつぶやきながらも、その公園のある方を向いた。

公園の名は、雲の見える丘公園。

雛子が天使と出会った場所だ。

雛子にとって、特別な公園だった。

「そこに行けば、星々がもつと際立っているのでしょうかね」

「うん、もつともつときれいに、もつともつと色がはっきりと見える」

「この街にいる間に、一度行ってみたいですね」

「行けるよ、この街はそんなに広い街じゃないし、鈴鳴屋から路面電車を乗り継げば、三〇分くらいだし」

「フフ、今度、案内してください」

「うん」

「あまり、夜空を意識して見ることはありませんでしたけど……見ていただけですごく癒され
ますね」

「魔を探求すれば、この星々で起きることもすべて解るようになるよ、天音」

「え？」

「わたしは、この世界のすべてを知りたい……」

「神宮司さん……」

「そのために孤独を選んだ。星だけじゃない！この街がどうして浮いているのか、わたしたち人間はどこから来たのか……知りたいことはたくさんある」

「神宮司さんは、わたしと見えている世界が違うのですね」

「そう……かな」

「それに較べたら、わたしは魔を学びつけかかなくて……」

世界がどうか、星がどうかなんて、考えた事もなかった。ただ、兄を生き返らせる。それだけが、天音の魔のすべてだ。それに始まり、それに終わる。

「神宮司さんの方が、すごく魔法使いらしいです」

「どうしてそんなに自分を卑下する、天音？天音は充分にすごい魔法使いだよ？」

「そうなのでしょうか？」

「そうだよ！」

雛子は天音に詰め寄った。

しかし天音はゆっくりと首を振った。

「わたしは神宮司さんが思っているほどすごくはありません」

「どうして？あの熊のぬいぐるみをわたしは研究させてもらった。あのテレポートのかかったボールペンも！」

「一つ一つは力の弱い魔法だけれど、付与のバランスも絶妙で、ちゃんと三ヶ月で切れるようになっていいる。しかもあんなにたくさんグズに付与できるなんて……」

正直、悔しかった。

自分こそが魔の第一人者だと……ずっとそう思って、生きてきたから。

「神宮司さん、でも今日、神宮司さんと出会って私は気付かされたんです」
「？」

「わたしの魔は、私利私欲の塊。まだ深いことは話せませんけれど、わたしが魔を学ぶきっかけは、わたしの欲望をかなえるため、ただそれだけだったのです」

「そんなの誰だってそうだと思う。魔は、自分の願いを叶えるもの！」

「それが、この世界の法則に背くことでもですか？」

「え？」

「命の理に、背くようなことであってもですか？」

「天音……何を言っているの？」

「神宮司さん、わたしはまだまだ未熟だったのでね……こんな……こんな簡単なことに、わたし気付いてなかったなんて……」

いつの間にか天音は目尻に涙をためていた。

「わ、わからない、わからないよ、天音。なにをそんなにあなたには悲しんでいる？」

雛子は狼狽えた。

自分よりも優れた魔法使い。

自分よりも孤独と不幸を乗り越えた魔法使い。

雛子にとって天音とは、そういう存在のはずだった。

いや、今でも、天音は雛子にとって嫉妬するけれども憧れの魔法使い。

その天音が自分の言葉で泣くなど、予想してもいなかった。

しかも天音は何を悲しんでいるのか、それが雛子には解らないのだ。

「自分の罪深さに気付いてしまったのです」

「どんな罪なの？」

「それは……なんて言えばいいんでしょう、罪に例えるなら、殺人に近いのかも知れませんが意味は……その、逆ですけれど……」

その言葉を聞いて、雛子の心臓が高鳴った。

殺人の逆だって!?

「それは……」

ウソだあり得ない、という気持ちだが、まず沸きあがる。

雛子はいったん言葉を飲んだ。

「イヤ、でも……それは……」

もう一度、言ってみようとするも、やはり理性が邪魔をする。だってこの先の言葉は、あまりにもバカらしい。

しかし、雛子は知っている。魔の世界にわずかながらに語り継がれる、究極の奥義の一つ。生命を弄ぶ、魔の秘術。

「まさか、天音は……」

しかし雛子が核心を尋ねるのを、天音は遮った。

「神宮司さん、こんなわたしでも、また会ってくれますか？」

天音は懇願するように、雛子を見つめていた。

「それはもちろん」

と、雛子が言い切ろうとしたときだった。

とてつもなく巨大な気配が、一瞬で自分たちに近づいたことを雛子は悟った。

同時に深く空間に割り込む、憎悪……いや、これは殺気！

「天音!!!」

雛子はどうすればいいのか解らなかったが、とにかくじっとしていることはまずいと思い、そのまま天音を突き飛ばした。

ひゅんっという、空気を切り裂く音。

「ぐっ!!」

天音の低く鈍いうなり声。

そしてイヤな何かがへしゃげるような音と、液体の飛び散る音。

その一部が雛子の手の甲に降りかかる。

生暖かい感触……!!

だが次の瞬間、雛子は思いついた呪文を唱え終えていた。

問一髪!

雛子が呪文を唱え終わったと同時に、ものすごい勢いで何かが飛んできて、そしてそれは雛子が張った魔法障壁に阻まれ、空中で止まるのだった。

「弾丸……!!」

雛子がそれに気付く前に、さらに大量の弾丸が雛子に向けられたが、それらもすべて空中で魔法障壁に衝突し、地面に落下するだけだった。

雛子は恐ろしさに震えた。

というのも、弾丸が飛んできた方向は、一方向ではなかったからだ。

四方八方から飛んできていたのだ。

敵は独りじゃない!?

雛子は最初そう思った。しかし、感じる殺気は一つしかない。

この矛盾を、雛子は解決できなかった。

「天音！」

とにかく人気が多いところへ……！

雛子は足下でうづくまっている天音の手を引っ張ろうとした。

「あ！」

そこで初めて、天音の状態を雛子は知覚した。

最初の一発は、天音に命中していたのだ。おそらく心臓を狙ったと思われるそれは、雛子が天音を突き飛ばすことによって免れた。

だがその軌道は、天音の右腕を引きちぎっていたのだ。

大量の血が地面に流れていた。

「う、腕を……とってきてください」

だが、天音自身は雛子が予想したよりも冷静だった。

雛子は少し安心すると、苦しむ天音を無理矢理引き摺って、六く七メートルは飛んだ天音の腕の所まで移動した。

雛子の張った魔法障壁は、雛子を中心に三メートル四方しかない。もし天音から雛子が離れれば、天音は魔法障壁の外に出てしまう。

「すぐに病院に……あ、いや、もっといい場所がある」

天野光人だ。

彼ならば、天音を治癒できる。

「大丈夫です」

天音は痛みをこらえながら雛子にもたれかかるように腕を受け取ると、左手で印を結び、呪文を唱えた。

すると腕と腕が引き合い、組織が絡み合い、お互いを取り込んでいく。

「ず、すごい……」

治癒の呪文は本来、魔法使いでは使えない。これらは光人達、神に仕える者の術。それを、天音は使いこなした。

「一瞬で、くっついてしまった……」

天音の腕はまるで何事もなかったかのように、元通りに戻ってしまった。

「治癒とは少し、違うのですけれど」

天音は悲しそうに、そういった。

殺人とは逆の術。

治癒とは違うけれども、肉体を治す術。

それだけ知れば、天音がなんの魔の術を得意としているのか、解ってしまう。

「天音、あなたは……」

「はい」

「死霊使い、ネクロマンサーだったのか」

「……………はい、それがわたしの本来の魔の力です」

天音はうつむくと、か弱い声でそう答えた。